

三年目の

聞作り

号外新

中等部

青山学院

林 謙二

二〇二二年度

二年 国語 平家物語新聞」

教科書(光村)に掲載されている場面から

産経新聞社「かんたん号外くん」を使って

号外新聞を作成する。

教科書(光村)に掲載されている場面から

産経新聞社「かんたん号外くん」を使って

号外新聞を作成する。

与一、人々の心を射る



原産経に扇島へ買められた平家が置いて船を浮かべ海上に逃れた先で義経と対峙し、平家は船の上を射る。この場面は、『平家物語』の「扇島」の一場面である。北風が強く吹き、船は揺れている。与一は矢を射る。見事にも見事に扇を射ち落とした。それを見人々は敵であろうと関係なく身をたてた。

敵も味方も圧巻！ 見事に日の丸を射る

平家と源氏の対立が進行して、日暮れを迎えている。船は揺れている。北風が強く吹き、船は揺れている。与一は矢を射る。見事にも見事に扇を射ち落とした。それを見人々は敵であろうと関係なく身をたてた。

学習に「新聞作成」を積極導入 青山学院中等部

2022/11/21 19:05

X ポスト X 反応 f BI 共有

学ぼう産経新聞 | お知らせ ライフ | 教育



掲示された「かんたん号外くん」で作った号外新聞＝東京都渋谷区の青山学院中等部

青山学院中等部（東京都渋谷区）では学習に新聞作成を積極的に取り入れている。今月5、6日に行われた中等部祭（文化祭）には生徒が作った新聞が展示され、訪れた保護者らの注目を集めていた。

国語の授業では2年生が、産経新聞のオリジナル号外作成アプリ「かんたん号外くん」を使い、「平家物語」から、那須与一（なすのよいち）の「扇の的」を題材に新聞を作った。

展示された号外には「与一、一撃で射抜く」などストレートに表現された見出しが並んだ。一方、「与一、人々の心を射る」「でかした那須与一 扇に見事命中 大成功！の、その後で…」とひねりを加えたものも。

指導した林謙二教諭は「見出しには、記事の要約のほか、読む人の心をくすぐり、興味をそそる働きもある。生徒は工夫していたのが分かる」、達富悠介教諭は「状況や場面に応じて、必要な情報を最低限の文章で表現するコンパクトライティングという技術がある。見出しは、コンパクトライティングを学ぶのにふさわしい」と評価した。

週刊

「号外くん」で「平家物語新聞」 国語力を育成 青山学院中等部

2022/10/21 20:06

X ポスト X 反応 f BI 共有

学ぼう産経新聞 | お知らせ ライフ | 教育



「かんたん号外くん」に見出しを打ち込んでいく生徒＝東京都渋谷区の青山学院中等部

「きょうはいよいよ新聞を作ります。タブレットを出してください」

青山学院中等部（東京都渋谷区）2年生の国語。林謙二教諭がIDとパスワードを黒板に書き出すと、生徒らは「かんたん号外くん」にログインした。

前回の授業までに『平家物語』の「扇の的」を終了。要約にあたる「リード」、5W1H（いつ、どこで、だれが、何を、なぜ、どのように）を織り込んだ「本文」など新聞の構成を学び、扇の的を題材とした記事を、生徒は完成させた。

この日は、見出しを考えるのが課題だ。

「見出しとは、それを読んだだけで大まかに内容が分かることと、読者が読んでみたいと思わせる必要があります」

週刊

林教諭は手本として作った『平家物語』を題材にした新聞を見せ、「読者の感情に訴

二〇二三年度

一年 国語

角川ビギナーズクラシック

竹取物語」を読み、号外新聞を作成

・教科書（光村）には冒頭のかぐや姫の誕生」の場面と 車持皇子が蓬萊の玉の枝をとってきた作り話」を語る場面が掲載。

その他の場面に焦点を当てて号外新聞を作ることを課題とした。

二〇二四年度

二年 国語

走れメロス」を読み、号外新聞を作成

- ・教科書（光村）に掲載されている「走れメロス」から一場面を選び、号外新聞を作る。

走れメロス」を読み、号外新聞を作成

・教科書（光村）に掲載されている「走れメロス」から一場面を選び、号外新聞を作る。

「走れメロス」号外新聞づくり

- 1 教科書p.196～211のうち、一場面を選ぶ。
- 2 その場面を簡潔に説明するリード文を176文字以内でまとめる。
※Wordに事前に書いておき、残しておくこと。
3. その場面の詳しいことや自分がどう思ったか、登場人物の人物像、作者太宰治の思いなどを本文にして、624文字以内にまとめること。
※同じく、Wordに事前に書いておき、残しておくこと。
4. 主見出し(7～10字)・そで見出し1(7～8字)・そで見出し2(7～10字)を考える。
注意点 ①記事の内容がわかるような見出しにする。
②魅力的な見出しにするが、うそを書いてはいけない。
③同じ単語が重ならないようにするとよい。
5. 貼り付ける画像を選ぶ。その際、著作権に注意すること。
基本的には「フリー素材」もしくは自分の作品から選ぶこと。
————— ここまでを事前に準備すること —————

走れメロス」を読み、号外新聞を作成

・教科書（光村）に掲載されている「走れメロス」から一場面を選び、号外新聞を作る。

「走れメロス」号外新聞づくり

- 1 教科書p.196～211のうち、一場面を選ぶ。
- 2 その場面を簡潔に説明するリード文を176文字以内でまとめる。
※Wordに事前に書いておき、残しておくこと。
3. その場面の詳しいことや自分がどう思ったか、登場人物の人物像、作者太宰治の思いなどを本文にして、624文字以内にまとめること。
※同じく、Wordに事前に書いておき、残しておくこと。
4. 主見出し(7～10字)・そで見出し1(7～8字)・そで見出し2(7～10字)を考える。

注意点 ①記事の内容がわかるような見出しにする。

②魅力的な見出しにするが、うそを書いてはいけない。

③同じ単語が重ならないようにするとよい。

5. 貼り付ける画像を選ぶ。その際、著作権に注意すること。

基本的には「フリー素材」もしくは自分の作品から選ぶこと。

————— ここまでを事前に準備すること —————

走れメロス」を読み、号外新聞を作成

・教科書（光村）に掲載されている「走れメロス」から一場面を選び、号外新聞を作る。

「走れメロス」号外新聞づくり

- 1 教科書p.196～211のうち、一場面を選ぶ。
- 2 その場面を簡潔に説明するリード文を176文字以内でまとめる。
※Wordに事前に書いておき、残しておくこと。
3. その場面の詳しいことや自分がどう思ったか、登場人物の人物像、作者太宰治の思いなどを本文にして、624文字以内にまとめること。
※同じく、Wordに事前に書いておき、残しておくこと。
4. 主見出し(7～10字)・そで見出し1(7～8字)・そで見出し2(7～10字)を考える。

注意点 ①記事の内容がわかるような見出しにする。

②魅力的な見出しにするが、うそを書いてはいけない。

③同じ単語が重ならないようにするとよい。

5. 貼り付ける画像を選ぶ。その際、著作権に注意すること。

基本的には「フリー素材」もしくは自分の作品から選ぶこと。

————— ここまでを事前に準備すること —————

走れメロス」を読み、号外新聞を作成

・教科書（光村）に掲載されている「走れメロス」から一場面を選び、号外新聞を作る。

「走れメロス」号外新聞づくり

- 1 教科書p.196～211のうち、一場面を選ぶ。
- 2 その場面を簡潔に説明するリード文を176文字以内でまとめる。
※Wordに事前に書いておき、残しておくこと。
3. その場面の詳しいことや自分がどう思ったか、登場人物の人物像、作者太宰治の思いなどを本文にして、624文字以内にまとめること。
※同じく、Wordに事前に書いておき、残しておくこと。
4. 主見出し(7～10字)・そで見出し1(7～8字)・そで見出し2(7～10字)を考える。

注意点 ①記事の内容がわかるような見出しにする。

②魅力的な見出しにするが、うそを書いてはいけない。

③同じ単語が重ならないようにするとよい。

5. 貼り付ける画像を選ぶ。その際、著作権に注意すること。

基本的には「フリー素材」もしくは自分の作品から選ぶこと。

————— ここまでを事前に準備すること —————

走れメロス」を読み、号外新聞を作成

・教科書（光村）に掲載されている「走れメロス」から一場面を選び、号外新聞を作る。

「走れメロス」号外新聞づくり

6. タブレットで、「学ぼう産経新聞」のサイト
(<https://www.sankei.com/nie/>)を開き、「かんたん号外くん」をクリックする。
7. ログインする。ログインID ao~~~~ ※パスワードは授業内で知らせます。
8. 上段の「日付」「新聞名」「発行者(例・2D(1)青山太郎)を入力する。
9. 主見出し・そで見出し1・そで見出し2・画像・リード文・本文を貼り付けること。
10. 画像下の「絵解き(キャプション)」に「どのような画像(場面)か」を入力する。
11. 「作った新聞を確認」をクリックし、「PDFでダウンロード」し、保存する。
12. 保存したデータをteamsに提出すること。

走れメロス」を読み、号外新聞を作成

・教科書（光村）に掲載されている「走れメロス」から一場面を選び、号外新聞を作る。

「走れメロス」号外新聞づくり

注意

- ・6～10の作業途中の状態では保存することはできません。授業内で時間が足りない場合は6からやり直すことになります。
- ・指定された時間内でのみ、利用・作業すること。
- ・IDやパスワードを無関係な人に教えないこと。
- ・他人を傷つける内容や嫌がらせになる内容の記事・写真を掲載しないこと。
- ・写真やイラストの著作権に気をつけること。
- ・授業で指示された内容以外は掲載しないこと。授業担当の先生の指示に従うこと。
- ・個人情報の扱いに気をつけること。

走れメロス」を読み、号外新聞を作成

同じ単語が… 走る・走る・走る・走る…】

田中くらら

メロス新聞

令和6年10月17日（木）

走る！！メロス

殺される為に走る 友人を救う為に走る



翌る日の薄明の頃、メロスは頭を振り、身を霞を穿た、両腕を大きく振り、雨の中えいといと大声を挙げて自分を叱りながら前を走り、メロスは殺される為に走った。身代わりの友を救う為に走った。全里平ばに到達した頃、川が氾濫した。メロスはうすくまり、神に哀願した。ついに覚悟を決め、川を渡った。

目が覚めたのは翌る日の薄明の頃、メロスは頭を振り、身を霞を穿た、両腕を大きく振り、雨の中えいといと大声を挙げて自分を叱りながら前を走り、メロスは殺される為に走った。身代わりの友を救う為に走った。全里平ばに到達した頃、川が氾濫した。メロスはうすくまり、神に哀願した。ついに覚悟を決め、川を渡った。

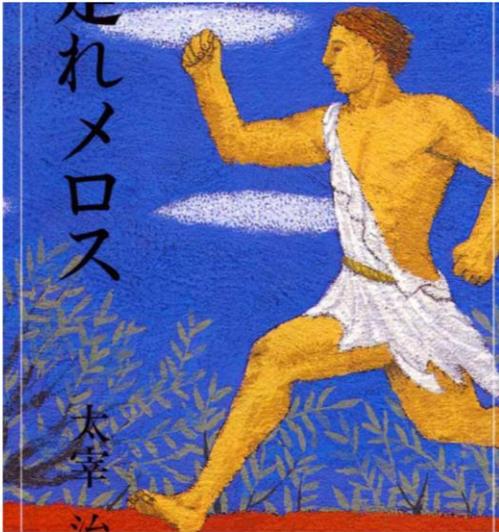
走れメロス」を読み、号外新聞を作成

文末が同じ品詞……」

メロス濁流を泳ぐ

覚悟を決める

親友の為に戦う



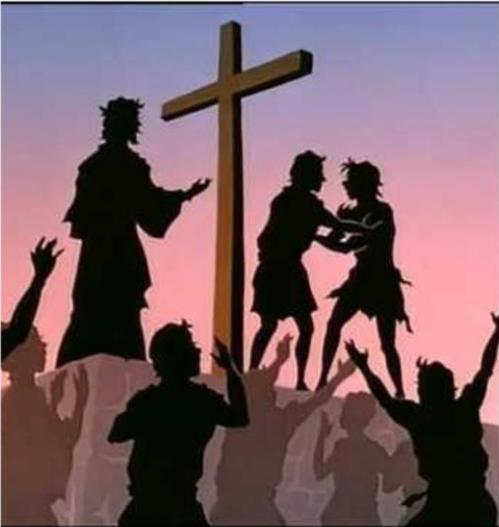
メロスは城に戻るために走っている。昨夜の雨により川が氾濫しておりわたるのが困難になってしまっている。川が氾濫しているのは、メロスの親友の死に責任がある。メロスは、親友の死を悔いて、城にたどり着かなければならない。メロスは、親友の死を悔いて、城にたどり着かなければならない。メロスは、親友の死を悔いて、城にたどり着かなければならない。

メロスは絶望の中、川に冷たい水にかき分け、逆泳しながら進む。流れる水が、メロスの心を洗った。メロスは、親友の死を悔いて、城にたどり着かなければならない。メロスは、親友の死を悔いて、城にたどり着かなければならない。メロスは、親友の死を悔いて、城にたどり着かなければならない。

王との約束

メロスの到着

民衆の感動と王の改心



メロスは王との約束のため帰ってきた。メロスとセリヌンティウスが自分たちの罪を言い合い、殴り合ったところを見た王と民衆はそれに感動した。王は約束を守り正義を貫いた行動に感心し、今までの行動とは違い改心した。

メロスは以前王と約束をしていました。唯一の友のセリヌンティウスを王に差し出し旅に出ます。苦難の連続を乗り越え、死なせないと戻ってきたメロスに王は感動します。そして二人ともを疑ったことに罪悪感を感じ、殴り合った二人の友情に民衆や王が感動します。この時二人とも自分たちの友情を疑っていたのだとわかります。僕がセリヌンティウスの立場だったらメロスのことを疑い憎んでいると思います。セリヌンティウスのメロスを信じる心にも感動しました。この場面を読む限り、メロスの人物像が分かります。正義感があり、約束を破らない人だと思いましたね。

走れメロス」を読み、号外新聞を作成

文末が違う雰囲気】

藤原 璃咲

メロス 新聞

令和6年10月17日（木）

メロス、間に合うか

信実を貫き通す

最後まで諦めない根性



眼から覚めたメロスは、潮水を飲み、肉体と精神が回復するともに、再び走ろうという決意と義行は信実を貫き通す。自分を守る意志を叫び、走り出した。走っても無敵だ」と言われても強い意志を持ちながら最後の死力を尽くして刑場へと走った。

メロスは、眼から覚めた後、潮水を出して肉を取り戻した。そして、肉の疲労回復とともに希望が生まれた。刑場へ向かう途中、潮水を飲み、肉体と精神が回復する。そして、再び走ろうという決意と義行は信実を貫き通す。自分を守る意志を叫び、走り出した。走っても無敵だ」と言われても強い意志を持ちながら最後の死力を尽くして刑場へと走った。

齋藤 玲

友情 新聞

令和6年10月17日（木）

メロス、友を人質に

2人の信頼関係

王とかわした約束とは



メロスが自分の唯一の妹の結婚式のために、日圓町に帰らせてもらい代わりの友人であるセリスンテウスを人質にとり、メロスにとって辛い本気で処刑されることを覚悟し提案を主にする。

メロスが自分の唯一の妹の結婚式のために、日圓町に帰らせてもらい代わりの友人であるセリスンテウスを人質にとり、メロスにとって辛い本気で処刑されることを覚悟し提案を主にする。

～「かんたん号外く

ん」

を使って

青山学院

中等部

林 謙二

生徒の力

見出しに学ぶ

短くまとめる

印象づける

ことばの選び方



教員の目を開かせる

評価への気づき

二〇二五年度

三年目の

聞作り

号外新

二〇二五年度

三年目の

号外新

聞作り

形』菊池寛

東京書籍

新しい国語 3年

三年目の

号外新

聞作り

形』菊池寛

東京書籍

新しい国語 3年

・一学期期末試験後(自宅学習期間)
の課題

終業式までに号外新聞を作り、

teamsに提出」

三年目の

号外新

聞作り

形』菊池寛

東京書籍

新しい国語 3年

・一学期期末試験後(自宅学習期間)
の課題

終業式までに号外新聞を作り、

teamsに提出」

すでに二年経験しているので、細かな指示は出さなくても大丈夫。

形』菊池寛

摂津半国の主であった松山新介の侍大将中村新兵衛は、五畿内中国に聞こえた大豪の士であった。

その頃、畿内を分領していた筒井、松永、荒木、和田、別所など大名小名の手の者で、檜中村」を知らぬ者は、恐らく一人もなかっただろう。それほど、新兵衛はそのしごき出す三間柄の自身の槍の矛先で、先駆けしんがりの功名を重ねていた。そのうえ、彼の武者姿は戦場において、水際立った華やかさを示していた。火のような猩々緋の羽織を着て、唐冠纓金のかぶとをかぶった彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりの鮮やかさを持っていた。

ああ猩々緋よ唐冠よ。」と敵の雑兵は、新兵衛の槍先を避けた。味方が崩れ立ったとき、激浪の中に立ついわおのように敵勢を支えている猩々緋の姿は、どれほど味方にとって頼もしいものであったか分からなかった。また嵐のように敵陣に殺到するとき、その先登に輝いている唐冠のかぶとは、敵にとつてどれほどの脅威であるか分からなかった。

「こつして槍中村の猩々緋と唐冠のかぶとは、戦場の華であり敵に対する脅威であり味方にとっては信頼的であった。

新兵衛殿、折り入ってお願ひがある。」と、元服してからまだ間もないらしい美男の侍は、新兵衛の前に手をついた。何事じや、そなたと我らの間に、さような辞儀はいらぬぞ。望みというを、はよう言つてみい。」と育むような慈顔をもつて、新兵衛は相手を見た。

その若い侍は、新兵衛の主君松山新介の側腹の子であった。そして、幼少の頃から、新兵衛が守役として、我が子のように慈しみ育ててきたのであった。

ほかのこともおられない。明日は我らの初陣じやほどに、なんぞ華々しい手柄をしてみたい。ついでには御身様の猩々緋と唐冠のかぶとを貸してもらぬか。あの羽織とかぶとを着て、敵の目を驚かしてみようじやない。」

「ハハハ。念もないことじや。」新兵衛は高らかに笑った。新兵衛は、相手の子供らしい無邪気な功名心を快く受け入れることができた。

が、申ししておく、あの羽織やかぶとは、申さば中村新兵衛の形じやわ。そなたが、あの品々を身に着けるうえからは、我らほどの肝魂を持たいではかなわぬことぞ。」と言いながら、新兵衛はまた高らかに笑った。

その明るる日、摂津平野の一角で、松山勢は、大和の筒井順慶の兵としてのぎを削った。戦いが始まる前、いつものように猩々緋の武者が唐冠のかぶとを朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗りをしたかと思うと、駒の頭を立て直して、一気に敵陣に乗り入った。

吹き分けられるように、敵陣の一角が乱れたところを、猩々緋の武者は槍をつけたかと思うと、早くも三、四人の端武者を、突き伏せて、また悠々と味方の陣へ引き返した。

その日に限つて、黒革緋の鎧を着て、南蛮鉄のかぶとをかぶっていた中村新兵衛は、会心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者ぶりを眺めていた。そして自分の形だけすらこれほどの力を持っているということに、かなり大きい誇りを感じていた。

彼は、二番槍は、自分が合わさうと思つたので、駒を乗り出すと、一文字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には、戦わずして浮き足立った敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかった。そのうえに彼らは猩々緋の檜中村」に突き乱された恨みを、この黒革緋の武者の上に復讐せんとして、たけり立っていた。

新兵衛は、いつもとは、勝手が違つていることに気がついた。いつもは虎に向かつている羊のようなおしげが、敵にあった。彼らがうろたえ血迷うところを突き伏せるのに、何の造作もなかった。今日は、彼らに対等の戦いをするときのように、勇み立っていた。どの雑兵もどの雑兵も十二分の力を新兵衛に対し発揮した。二、三人突き伏せることさえ容易ではなかった。敵の槍の矛先がともすれば身をかすった。新兵衛は必死の力を振るつた。平素の二倍もの力をさえ振るつた。が、彼はともすれば突き負けそうになった。手軽にかぶとや猩々緋を貸したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめたときであった。敵の突き出した槍が、緋の裏をかいいて彼の脾腹を貫いていた。

形』菊池寛

摂津半国の主であった松山新介の侍大将中村新兵衛は、五畿内中国に聞こえた大豪の士であった。

その頃、畿内を分領していた筒井、松永、荒木、和田、別所など大名小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は、恐らく一人もなかっただろう。それほど、新兵衛はそのしごき出す三間柄の自身の槍の矛先で、先駆けしんがりの功名を重ねていた。そのうえ、彼の武者姿は戦場において、水際立った華やかさを示していた。火のような猩々緋の羽織を着て、唐冠纓金のかぶとをかぶった彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりの鮮やかさを持っていた。

「ああ猩々緋よ唐冠よ。」と敵の雑兵は、新兵衛の槍先を避けた。味方が崩れ立ったとき、激浪の中に立ついわおのように敵勢を支えている猩々緋の姿は、どれほど味方にとって頼もしいものであったか分からなかった。また嵐のように敵陣に殺到するとき、その先登に輝いている唐冠のかぶとは、敵にとつてどれほどの脅威であるか分からなかった。

こつして槍中村の猩々緋と唐冠のかぶとは、戦場の華であり敵に対する脅威であり味方にとっては信頼的であった。

新兵衛殿、折り入ってお願ひがある。」と、元服してからまだ間もないらしい美男の侍は、新兵衛の前に手をついた。何事じゃ、そなたと我らの間に、さような辞儀はいらぬぞ。望みというを、はよと言つてみい。」と育むような慈顔をもつて、新兵衛は相手を見た。

その若い侍は、新兵衛の主君松山新介の側腹の子であった。そして、幼少の頃から、新兵衛が守役として、我が子のように慈しみ育ててきたのであった。

ほかのこともおられない。明日は我らの初陣じゃほどに、なんぞ華々しい手柄を試みたい。ついでには御身様の猩々緋と唐冠のかぶとを貸したもらぬか。あの羽織とかぶとを着て、敵の目を驚かしてみようじゃね。」

ハハハハ。念もないことじゃ。「新兵衛は高らかに笑った。新兵衛は、相手の子供らしい無邪気な功名心を快く受け入れることができた。

が、申しておく、あの羽織やかぶとは、申さば中村新兵衛の形じゃわ。そなたが、あの品々を身に着けるうえからは、我らほどの肝魂を持たいではかなわぬことぞ。」と言いながら、新兵衛はまた高らかに笑った。

その明るる日、摂津平野の一角で、松山勢は、大和の筒井順慶の兵としのぎを削った。戦いが始まる前、いつものように猩々緋の武者が唐冠のかぶとを朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗りをしたかと思うと、駒の頭を立て直して、一気に敵陣に乗り入った。

吹き分けられるように、敵陣の一角が乱れたところを、猩々緋の武者は槍をつけたかと思うと、早くも三、四人の端武者を、突き伏せて、また悠々と味方の陣へ引き返した。

その日に限って、黒革緋の鎧を着て、南蛮鉄のかぶとをかぶっていた中村新兵衛は、会心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者ぶりを眺めていた。そして自分の形だけすらこれほどの力を持っているということに、かなり大きい誇りを感じていた。

彼は、二番槍は、自分が合わそうと思ったので、駒を乗り出すと、一文字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には、戦わずして浮き足立った敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかった。そのうえに彼らは猩々緋の「槍中村」に突き乱された恨みを、この黒革緋の武者の上に復讐せんとして、たけり立っていた。

新兵衛は、いつもとは、勝手が違っていることに気がついた。いつもは虎に向かっている羊のようなおじけが、敵にあった。彼らがうろたえ血迷うところを突き伏せるのに、何の造作もなかった。今日は、彼ら是对等の戦いをするときのように、勇み立っていた。どの雑兵もどの雑兵も十二分の力を新兵衛に対し発揮した。二、三人突き伏せることさえ容易ではなかった。敵の槍の矛先が、ともすれば身をかすった。新兵衛は必死の力を振るった。平素の二倍もの力をさえ振るった。が、彼はともすれば突き負けそうになった。手軽にかぶとや猩々緋を貸したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめたときであった。敵の突き出した槍が、緋の裏をかいて彼の脾腹を貫いていた。

最強「槍中村」の実態



「槍中村」で名をはせた中村新兵衛という男がいた。その狸々緋の羽織と唐冠の兜は敵に対する脅威であり見方にとっては信頼の的であった。しかし仲間「槍中村の「形」を貸したがために、残酷にもその生涯を終える。

強いと思ひ込みか 油断し雑兵に殺される

自分は強いという思ひ込みと油断から、いつの間にか追い込まれた様子。

時は戦国時代、現在の大坂府と兵庫県の一部の主であった松山新介の侍大将の、中村新兵衛という男がいた。狸々緋の羽織と唐冠の兜をかぶった姿は勇ましく、新兵衛は当時近畿地方で「槍中村」と呼ばれていた。ある日、新兵衛が我が子のように育ててきた若侍に、「今日は自分の初陣の日であるから、羽織と兜を貸してほしい。」と頼まれた。次の日、新兵衛は「形」をまとった若侍は目覚ましい活躍をし、敵に虎に向かっている羊のような怖気があるのを見て、新兵衛は、自分の形だけをすらすらと、この力に強いついては、誇りを感じていた。しかし、その喜びもつかの間普通の雑兵として戦に向かった新兵衛は、敵に脾腹を買かれて死んだ。冠の兜の形にとられず、唐冠の形に、自分の形が実力不足で上回ってしまった。油断をしてしまったのである。

中村雑兵に敗れる

戦に油断は禁物 羽織とかぶとを貸す



松山新介の侍大将で槍の名手である中村新兵衛は、新介の側腹の子の初陣に新兵衛の狸々緋の羽織と唐冠兜金のかぶとを貸した。そして次の戦い、新兵衛は普段よりも雑兵が力を発揮していることに気づき、負けてしまった。

中村新兵衛の羽織とかぶとを身につけた武者とその後ろにいる新兵衛や雑兵

中村新兵衛は五畿内中国に聞こえた大豪の士であり、槍の名手として知られていた。新兵衛が戦場で身にまとう狸々緋の羽織と唐冠兜金のかぶとは敵にとつての脅威であった。ある日、松山新介の側腹の子が自分の初陣のときに新兵衛の羽織とかぶとを貸してほしく頼んできた。新兵衛は、羽織とかぶとは、自分の程の肝魂を持たないといけな、と忠告したが、そして、彼の初陣の日、羽織とかぶとを身につけた武者は、敵の雑兵を軽々と倒していった。新兵衛は、自分の力を持つていてもこれまでで力を持てない。新兵衛は、自分のかぶとを貸すことに感心した。しかし、狸々緋の武者とは戦わなかった。新兵衛はいつもと違つた敵陣が新兵衛におそいかかった。新兵衛は、自分のかぶとを貸すことに気づいた。敵兵が、対等の戦いをするように勇み立っていった。自分ではなく、羽織とかぶとに皆が恐れていることに気づき、貸したことを後悔した。その瞬間、敵の槍が新兵衛の脾腹を買った。

『形』 菊池寛

中村雑兵に敗れる

戦に油断は禁物

羽織とかぶとを貸す

松山新介の侍大将で槍の名手である中村新兵衛は、新介の側腹の子の初陣に新兵衛の狸々緋の羽織と唐冠瓔金のかぶとを貸した。そして次の戦い、新兵衛は普段よりも雑兵が力を発揮していることに気づき、負けてしまった。



中村新兵衛の羽織とかぶとを身につけた武者とその後ろにいる新兵衛や雑兵

中村新兵衛は五畿内中国に聞こえた大豪の士であり、槍の名手として知られていた。新兵衛が戦場で身にまとった狸々緋の羽織と唐冠瓔金のかぶとは敵にとっての脅威であった。ある日、松山新介の側腹の子が自分の初陣のときに新兵衛の羽織とかぶとを貸してほしいと頼んできた。新兵衛は快く受け入れそれらを貸したが、羽織やかぶとは、自分の程の肝魂を持たないといけない、と忠告した。そして、彼の初陣の日、羽織とかぶとを身につけた武者は、敵の雑兵を軽々と倒していった。新兵衛は、自分の羽織とかぶとを貸していてもこれまでの力を持つていた。新兵衛はいつもと違った敵陣が新兵衛におそいかかったことに気づいた。敵兵が、対等の戦いをするように勇み立っていった。自分ではなく、羽織とかぶとに皆が恐れていることに気づいた。その瞬間、敵の槍が新兵衛の側腹を貫いた。

松山新介の侍大将で槍の名手である中村新兵衛は、新介の側腹の子の初陣に新兵衛の狸々緋の羽織と唐冠瓔金のかぶとを貸した。そして次の戦い、新兵衛は普段よりも雑兵が力を発揮していることに気づき、負けてしまった。

最強「槍中村」の実態

強いと思ひ込みか 油断し雑兵に殺される

「槍中村」で名をはせた中村新兵衛という男がいた。その狸々緋の羽織と唐冠の兜は敵に対する脅威であり見方にとっては信頼の的であった。しかし仲間が槍中村の「形」を貸したために、残酷にもその生涯を終える。

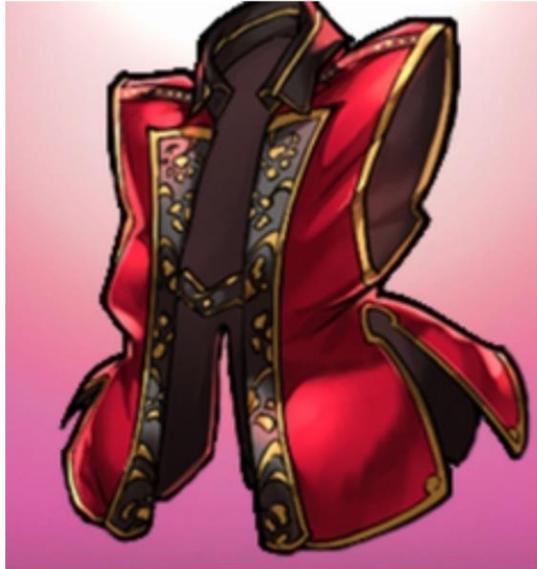


自分は強いという思ひ込みと油断から、いつの間にか追い込まれた様子。

時は戦国時代、現在の大阪府と兵庫県の一部の主であった松山新介の侍大将の、中村新兵衛という男がいた。狸々緋の羽織と唐冠の兜をかぶった姿は勇ましく、新兵衛は当時近畿地方で「槍中村」と呼ばれていた。ある日、新兵衛が我が子のように育ててきた若侍に、「今日は自分の初陣の日であるから、羽織と兜を貸してほしい。」と頼まれた。次の日、新兵衛の「形」をまとった若侍は目覚ましい活躍をし、敵に虎に向かっている羊のような怖気があるのを見て、新兵衛は、自分の形だけにとらわれてもほどの力を持っている、というように強いつくりを感じていた。しかし、その喜びもつかの間普通の雑兵として戦に向かった新兵衛は、敵に側腹を貫かれて死んだ。冠の兜の形にとらわれすぎた新兵衛は、自分の形が実力ではないと気づかずに、油断をしてしまったのである。

「槍中村」で名をはせた中村新兵衛という男がいた。その狸々緋の羽織と唐冠の兜は敵に対する脅威であり見方にとっては信頼の的であった。しかし仲間が槍中村の「形」を貸したために、残酷にもその生涯を終える。

「形」に宿る力



守られていた 気づいた時には手遅れ

摂津半国での合戦において、「楢中村」と呼ばれた名将・中村新兵衛が戦死した。死の原因は、彼の象徴とも言える猩猩縞の羽織りと唐冠の兜を側腹の子に貸してしまい、自らは別の姿で戦場に立ったことだった。

この物語の中村新兵衛は、大豪の士として名をどろかしていた。新兵衛はいつも猩猩縞の羽織と唐冠の兜を身に着けていた。その品々は中村新兵衛の形として強さを表すものとなり広まっていた。その品々を見た雑兵は、恐れ戦わずして浮足立つほどだった。ある日自分の育てた若侍に頼まれ、羽織と兜を貸して自身は黒革織の鎧を着て戦へ行った。新兵衛は羽織と兜を身にかけた若い侍の華々しい活躍を見て自分の形を持つ強さを誇りに思った。しかし新兵衛は攻めもなかなか敵を倒せなかった。それはいつもの羽織と兜がなくなった。敵が新兵衛だと気づいておらず本気で戦っているからである。長い間恐れながら戦う敵を衰えていたのを見誤り、自分の羽織と兜の力を見誤り、油断していた新兵衛は敵の雑兵に殺されてしまった。

大豪の士雑兵に敗北

強さゆえのおづり 形があつてこそその力



大豪の士中村新兵衛は、戦で猩々縞の羽織と唐冠の兜を身に着けていた。それは強さの象徴と敵から恐れられた。しかしその品々を若い侍に貸し、新兵衛は雑兵の装備で戦に挑んだが、衰えていたため雑兵にやられてしまった。

戦わずして浮足立つ敵兵

この物語の中村新兵衛は、大豪の士として名をどろかしていた。新兵衛はいつも猩猩縞の羽織と唐冠の兜を身に着けていた。その品々は中村新兵衛の形として強さを表すものとなり広まっていた。その品々を見た雑兵は、恐れ戦わずして浮足立つほどだった。ある日自分の育てた若侍に頼まれ、羽織と兜を貸して自身は黒革織の鎧を着て戦へ行った。新兵衛は羽織と兜を身にかけた若い侍の華々しい活躍を見て自分の形を持つ強さを誇りに思った。しかし新兵衛は攻めもなかなか敵を倒せなかった。それはいつもの羽織と兜がなくなった。敵が新兵衛だと気づいておらず本気で戦っているからである。長い間恐れながら戦う敵を衰えていたのを見誤り、自分の羽織と兜の力を見誤り、油断していた新兵衛は敵の雑兵に殺されてしまった。

『形』 菊池寛

大豪の士雑兵に敗北

強さゆえのおづり

形があつてこそその力



敵兵立つ足浮せず

大豪の士中村新兵衛は、戦で猩々緋の羽織と唐冠の兜を身に付けていた。それは強さの象徴と敵から恐れられた。しかしその品々を若い侍に貸し、新兵衛は雑兵の装備で戦に挑んだが、衰えていたため雑兵にやられてしまった。

この物語の中村新兵衛は、大豪の士として名をどろかしていた。新兵衛はいつも猩々緋の羽織と唐冠の兜を身に付けていたため、その品々は中村新兵衛の形として強さを表すものとなり広まっていた。その品々を見た雑兵は、恐れ戦わずして浮足立つほどだった。ある日自分の育てた若い侍に頼まれ、羽織と兜を貸して自身は黒革織の鎧を着て戦へ行った。新兵衛は羽織と兜を身に付けた若い侍の華々しい活躍を見て自分の形を持つ強さを誇りに思った。しかし新兵衛は攻めもなかなか敵を倒せなかった。それはいつもの羽織と兜がなくなったため、敵が新兵衛だと気づいておらず本気で戦っているからである。長い間恐れながら戦う敵ばかり相手していた新兵衛は衰えていたの力を見誤り、自分の羽織と兜の力を見誤り、油断していた新兵衛は敵の雑兵に殺されてしまった。

大豪の士中村新兵衛は、戦で猩々緋の羽織と唐冠の兜を身に付けていた。それは強さの象徴と敵から恐れられた。しかしその品々を若い侍に貸し、新兵衛は雑兵の装備で戦に挑んだが、衰えていたため雑兵にやられてしまった。

「形」に宿る力

守られていた

気づいた時には手遅れ



摂津半国での合戦において、「楢中村」と呼ばれた名将・中村新兵衛が戦死した。死の原因は、彼の象徴とも言える猩々緋の羽織りと唐冠の兜を側腹の子に貸してしまい、自らは別の姿で戦場に立ったことだった。

摂津半国の武士である中村新兵衛は、猩々緋の羽織りと唐冠の鎧を身にまとい、戦場で大きな存在感を放っていた。その姿は敵にとっては恐ろしく、味方にとっては希望のようなものだった。ある日新兵衛のもとに、側腹の子である若い武士がやってきて、「その猩々緋の鎧と兜を貸してほしい」とお願いをされる。新兵衛は最初は笑って受け入れ、あの鎧や兜は自分の「形」のようなものだ、と言って冗談のように語る。戦の日、若武者はその鎧を着て立派に戦ったが、形を失った新兵衛は敵の激しい攻撃に苦しみ、ついには敵の槍で突かれて命を落としてしまう。新兵衛は形にこだわらない振舞いをしてきたが、本当はその形に支えられていたのかもわからない。外見や姿がただの飾りではなく、人の力になつていたということ、人を動かす力が形にはあることを、この出来事はおしえてくれた。

摂津半国での合戦において、「楢中村」と呼ばれた名将・中村新兵衛が戦死した。死の原因は、彼の象徴とも言える猩々緋の羽織りと唐冠の兜を側腹の子に貸してしまい、自らは別の姿で戦場に立ったことだった。

時すでに遅し槍中村

若い侍の願い聞く 羽織が実力を超えた



猩々緋の羽織に金のかぶとを身に着け名をはせていた中村新兵衛。彼は守役として育ててきた若い侍の願いで羽織を貸すことにした。戦で彼が二番槍として敵陣に向かうと敵に怯えはなく後悔すると同時に脇腹を刺された。

撰津半国の主である松山新介の侍大将、中村新兵衛は「槍中村」として有名だった。猩々緋の羽織を着て、金色のかぶとを身に着けた彼の姿は、戦場で輝くほどの鮮やかさを持っていた。彼は味方の信頼の的であった。ある日、若い侍が新兵衛に猩々緋のかぶとを貸してほしいとお願いに来た。その侍は君主である松山新介の側腹の子で、幼いころから新兵衛が守役としてわが子のように育ててきたこともあり、新兵衛はころよくその願いを聞き入れた。戦いの日、新兵衛は猩々緋の羽織の姿を客観的に見た彼が活躍するのを見た。いつも自分が身に着けている猩々緋は、大きな誇りを感じていた。二番槍は自分が行こうとすると、敵にいつも怯えはなかった。二番槍が本物の槍中村だということに気付いていなかった。後悔が頭をよぎったときには、敵の槍が新兵衛の脇腹を刺していた。

時すでに遅し槍中村

若い侍の願い聞く 羽織が実力を超えた

猩々緋の羽織に金のかぶとを身に着け名をはせていた中村新兵衛。彼は守役として育ててきた若い侍の願いで羽織を貸すことにした。戦で彼が二番槍として敵陣に向かうと敵に怯えはなく後悔すると同時に脇腹を刺された。



猩々緋の羽織

摂津半国の主である松山新介の侍大将、中村新兵衛は「槍中村」として有名だった。猩々緋の羽織を着て、金色のかぶとを身に着けた彼の姿は、戦場で輝くほどの鮮やかさを持っていった。彼は味方の信頼の的であった。ある日、若い侍が新兵衛に猩々緋のかぶとを貸してほしいとお願いに来た。その侍は君主である松山新介の側腹の子で、幼いころから新兵衛が守役としてわが子のように育ててきたこともあり、新兵衛はころよその願いを聞き入れた。戦いの日、新兵衛は猩々緋の羽織が活躍するのを見た。いつも自分が身に着けている猩々緋の羽織の姿を客観的に見た彼は、大きな誇りを感じていった。二番槍は自分が行こうとすると、敵にいつも怯えはなかった。二番槍が本物の槍中村だということに気付いていなかった。後悔が頭をよぎったときには、敵の槍が頭をよぎったとき

猩々緋の羽織に金のかぶとを身に着け名をはせていた中村新兵衛。彼は守役として育ててきた若い侍の願いで羽織を貸すことにした。戦で彼が二番槍として敵陣に向かうと敵に怯えはなく後悔すると同時に脇腹を刺された。

村中槍に遅しすでに時

若い侍の願い聞く 羽織が実力を超えた

猩々緋の羽織に金のかぶとを身に着け名をはせていた中村新兵衛。彼は守役として育ててきた若い侍の願いで羽織を貸すことにした。戦で彼が二番槍として敵陣に向かうと敵に怯えはなく後悔すると同時に脇腹を刺された。



猩々緋の羽織

摂津半国の主である松山新介の侍大将、中村新兵衛は「槍中村」として有名だった。猩々緋の羽織を着て、金色のかぶとを身に着けた彼の姿は、戦場で輝くほどの鮮やかさを持っていった。彼は味方の信頼の的であった。ある日、若い侍が新兵衛に猩々緋のかぶとを貸してほしいとお願いに来た。その侍は君主である松山新介の側腹の子で、幼いころから新兵衛が守役としてわが子のように育ててきたこともあり、新兵衛はころよその願いを聞き入れた。戦いの日、新兵衛は猩々緋の羽織の姿を客観的に見た。自分が身に着けている猩々緋の羽織の姿を誇りに感じていた。二番槍は自分が行くこと、敵にいつも怯えはなかった。二番槍が本物の槍中村だということに気付いていなかった。後悔が頭をよぎったときには、敵の槍が頭をよぎったとき

猩々緋の羽織に金のかぶとを身に着け名をはせていた中村新兵衛。彼は守役として育ててきた若い侍の願いで羽織を貸すことにした。戦で彼が二番槍として敵陣に向かうと敵に怯えはなく後悔すると同時に脇腹を刺された。

見出し「から

ワード文へ

村中槍に遅しすでに時

若い侍の願い聞く 羽織が実力を超えた

猩々緋の羽織に金のかぶとを身に着け名をはせていた中村新兵衛。彼は守役として育ててきた若い侍の願いで羽織を貸すことにした。戦で彼が二番槍として敵陣に向かうと敵に怯えはなく後悔すると同時に脇腹を刺された。



猩々緋の羽織

摂津半国の主である松山新介の侍大将、中村新兵衛は「槍中村」として有名だった。猩々緋の羽織を着て、金色のかぶとを身に着けた彼の姿は、戦場で輝くほどの鮮やかさを持っていった。彼は味方の信頼の的であった。ある日、若い侍が新兵衛に猩々緋のかぶとを貸してほしいとお願いに来た。その侍は君主である松山新介の側腹の子で、幼いころから新兵衛が守役としてわが子のように育ててきたこともあり、新兵衛はころよその願いを聞き入れた。戦いの日、新兵衛は猩々緋の羽織が活躍するのを見た。いつも自分が身に着けている猩々緋の羽織の姿を客観的に見た彼は、大きな誇りを感じていた。二番槍は自分が行こうといたものように敵陣に向かうと、敵にいつも怯えはなかった。二番槍が本物の槍中村だということに気付いていなかったのだ。負けそうになったとき、後悔が頭をよぎったときには、敵の槍が頭をよぎったとき

猩々緋の羽織に金のかぶとを身に着け名をはせていた中村新兵衛。彼は守役として育ててきた若い侍の願いで羽織を貸すことにした。戦で彼が二番槍として敵陣に向かうと敵に怯えはなく後悔すると同時に脇腹を刺された。

見出し「から

ワード文へ

リード文とは

本文に入る前に内容の概略を伝え、理解を助けるための文章。(AIによる)

村中槍に遅しすでに時

若い侍の願い聞く 羽織が実力を超えた

猩々緋の羽織に金のかぶとを身に着け名をはせていた中村新兵衛。彼は守役として育ててきた若い侍の願いで羽織を貸すことにした。戦で彼が二番槍として敵陣に向かうと敵に怯えはなく後悔すると同時に脇腹を刺された。



猩々緋の羽織

摂津半国の主である松山新介の侍大将、中村新兵衛は「槍中村」として有名だった。猩々緋の羽織を着て、金色のかぶとを身に着けた彼の姿は、戦場で輝くほどの鮮やかさを持っていった。彼は味方の信頼の的であった。ある日、若い侍が新兵衛に猩々緋のかぶとを貸してほしいとお願いの来た。その侍は君主である松山新介の側腹の子で、幼いころから新兵衛が守役としてわが子のように育ててきたこともあり、新兵衛はころよその願いを聞き入れた。戦いの日、新兵衛は猩々緋の羽織が活躍するのを見た。いつも自分が身に着けている猩々緋の羽織の姿を客観的に見た彼は、大きな誇りを感じていた。二番槍は自分が行こうといたものように敵陣に向かうと、敵にいつも怯えはなかった。二番槍が本物の槍中村だということに気付いていなかったのだ。負けそうになったとき、後悔が頭をよぎったときには、敵の槍が頭をよぎったとき

猩々緋の羽織に金のかぶとを身に着け名をはせていた中村新兵衛。彼は守役として育ててきた若い侍の願いで羽織を貸すことにした。戦で彼が二番槍として敵陣に向かうと敵に怯えはなく後悔すると同時に脇腹を刺された。

見出し「から

ワード文へ

リード文とは

本文に入る前に内容の概略を伝え、理解を助けるための文章。(AIによる)

要約・あらすじ

の練習に